
フェアリー・サーナ

カナカナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フェアリー・サーナ

【Nコード】

N1705C

【作者名】

カナカナ

【あらすじ】

世界に、数十人しかいない、妖精使いことフェアリー・サーナ。太陽のクリスタルで、太陽の光を取り戻せ！

く始まり

雨が降る中、森の中を歩いている少年がいる。

その少年は、13才くらいだろうか。赤紫色のショートヘアに、あかいTシャツ。胸の所に大きな緑のリボンがある。その、隣には妖精がいる。と、いつでもあの、人間のような妖精ではない。

緑の丸い体にてっぺんに花。尻尾についている、クリスタルがキラキラと光る。

「世界中には、わずか、何十人しかいない、妖精使い。すなわち、フェアリー・サーナという人がいる。この少年、ロトがーそう。フェアリー・サーナ・・・!!」

その、少年ロトが緑の妖精に言った。「なかなか雨やまないね。リドマ」その、リドマといわれた妖精が怒鳴りだした。「だー!やまないじゃねーよ!お前が、方向オンチのせいでこーなっただんだけだろ!」リドマの黄色の瞳がロトを見る。

「ごめんよ。リドマ」ロトが誤るとその場は静かになった。・・・リドマがロトに怒鳴った。「静かすぎだー!なんか喋れー!」ロトが、リドマの口を抑えた。「しっ。」ロトが静かに言う。ロトの目先には騎士がいる。自分の村を指差すと馬に乗りーいつてしまった。ロトとリドマが茂みから出て来た。リドマが怒鳴る。「だー!どうしたんだよ!なんで隠れてんだよー!!」

ロトが、ゆっくりとした口調で言った。「あれは、シングル騎士団。通称、神の盾騎士団。」リドマが、ため息をつきながらロトに言った。「だからって、何で隠れるんだ?」ロトは、リドマの問いに答えなかった。

しばらくして、雨が止み村に帰った。ロトは、静かなリドマを見て、クスツと笑った。この、小さな村、マドレーンには、北の方に、シヤインツリー。通称、太陽の木がある。その木のそばには、ロトの母の墓がある。ロトが、太陽の木の所に来た。

かつて、母は自分をとても愛してくれてた。その事を思い出すと涙がこぼれる。ロトは、涙を服にこすり墓に、花を添えた。そして、手を合わせる。「お母さん。静かにお眠りください……」そう言っ
て、すぐに立つ。その時「ロト……」頭に、誰かの声が響いた。「リドマ。何か言った？」リドマが、首を振る。また聞こえる。「ロト……」ロトは、落ち着いて聞いた。「君は誰？」その声
が答える。「シャインツリーです……もう、太陽の光が無くなっ
てきています……」ロトが、驚いてシャインツリーを見る。そして、聞いた。「太陽の光って？どういう事だい？」返事がくる。「太陽の光が……この世界から、消えてしまっ
んです。」ロトは、少し黙り、やがてまた口を開いた。「どうすればいいんだ？」「太陽のクリスタルの話してますか？」ロトが、頷く。太陽のクリスタルとは、太陽のような光を持つクリスタルでも、おとぎ話の
はずじゃ……。シャインツリーが言う。「それは、おとぎ話では無い。本当に有ります。」ロトが、さらに驚いた表情をつくる。「どこにあるんだい？」シャインツリーが言う。「分かりません。けど、本
当にある事は確かです。どうか」ロトが、微笑んだ。「分かりました。太陽のクリスタルだね？たしか、3つあるんだろ？」シャインツリーが、ハイと言った。
そうと決まれば、寝ていたリドマを起こし、旅のしたくをしに家に向かう。
家には、16才か？赤いマフラーに、白の、袖なしのシャツ。茶色のジーンズ。赤い髪をした、青年がいた。横には、黄色で丸い、尻尾がつぼみの妖精がいる。「サン兄さん。僕は、いきますよ。」その、サンと呼ばれた青年が言う。「……太陽のクリスタルか？」ロトが頷く。サンがクスツと笑った。「俺も、いくよ。ロト。」ロトが青の瞳を輝かせながら言った。「兄さん！」ロトがサンに抱きつく。「分かったから、早く準備しとけ。明日いくぞ。」ロトが、二階に行き、準備を始める。ああ！明日が、早くこないかなあ。

ミランの森 (前書き)

ここは、ミランの森。

混合武器変化で、魔物を倒す!?

〜ミランの森〜

「ここは、どこだろうか。ロトが、辺りを見回す。そこは、暗闇だった。

サンもリドマもない。ーけど、何か暖かい光を感じる。誰だ？」「ロト・・・」声が聞こえてくる。「ロト！ロトってば！」その声でロトが起きた。リドマが、怒鳴る。「お前から、ゆつといて寝坊すんなー！！」「ごめんよ。リドマ」素直に謝る。ロトは、腰に愛用の短剣をつける。そして、赤いバンダナをつけた。気を引き締めて、外にむかうと、サンがまっていた。「おそいぞ。ロト。」「そうですのー！」隣の黄色の丸い妖精も言う。この妖精の名前はホルン。サンも、妖精使いなのだ。ロトは、サンに言った。「太陽の光を失うと、いまいる、魔物より、強い魔物がこの地上にくるんでしょ？」「サンが、かるく頷く。

二人と2匹が、この近くの森に向かった。「ここは、けっこー魔物くるからな。」「サンが、言う。ロトが、構えた。ガサガサ。茂みが動いた。「来るぞ。」「サンが呟くと、魔物が出てきた。

「こいつらは、ライカとススペルだ。」「ロトが、サンの言葉を冷静に聞く。

黄色のたて髪に、オレンジ色の体。

いまにも、スパークをしそうなのが、ライカ。ウサギのような見た目。爪が鋭く、目が赤い。こいつが、ススペル。

一匹と一頭が、襲ってきた。サンは、腰の剣を抜き出してライカをきる。ライカは、光の粒になり消えてしまった。魔界へ帰ったのだらう。

もう一匹の方の、ススペルは、ロトと戦っている。ロトは必死に短剣を振り回す。ススペルは、鋭い爪で襲ってくる。ロトはリドマを読んだ。「リドマ！混合武器変化だ！」「リドマが、舌打ちをして、ロトの前に来た。

「混合武器変化！！！」ロトの短剣にリドマが入った。その剣は、でかいハンマーになった。リドマの顔が、ハンマーの表にある。これは、妖精使いだけがつかえる技、混合武器変化。ソーラマジックという。

「ビッグプレッシャー！！」

そう叫ぶと、ロトがハンマーを振り下ろす。スペルも、光の粒になって消えた。

ロトが 混合武器変化を解除する。リドマが、笑った。「よくやったぞ！ロト！ハハッ！」

ロトも、落ち着いたようだ。立ち上がり、歩きだした。サンも後に続く。

「あー！村が、見えますの。サン様。」ホルンが、村を指差す。

ロト達は走って行った。「おお。でかい村・・・つてか、町じゃん。」サンが、言う。

ロト達は宿に向かった。今は、まだ昼だ。部屋を確保し、町を見て回った。人が賑わっている所がある。

ロト達は、その人だかりに紛れて、人々が見てる方を見た。

ピンクのロングヘアに、赤色の瞳。年は、14くらいか？踊り子のような。彼女は、ロトにウィンクした。ロトは、少し顔が赤くなつた。サンがそれを見て、クスクス笑う。そして、「この色男め。」と呟いた。

もう、夜だ。ロト達は、宿にいき、

眠りについた。

が、ロトは眠れない。しかたなく、起き上がり、外に行く。

右をみると、昼間の踊り子が、森にはいつていった。

くロールルの街く（前書き）

踊り子が、森へ・・・！！
おいかけてったロトの行方は？

〜ローレルの街〜

ロトは、踊り子がいっていった森に向かう。森は暗く、月明かりを頼りにして進んでいった。

・・・踊り子の姿も見えない。

「そう、ロトは、方向オンチなのだ。ロトは、暗い森の中をさ迷っていた。しばらく歩いていると誰かの声が、聞こえた。ロトは、近くの茂みに隠れ、その話を聞いた」

「おい。ユリ様はいたか？」この声は、神の盾騎士の声だ。「いや、いない。」男が、二人いるようだ。

「もつと、よく探すぞ。」男達は、そう言うと、どこかへ行ってしまった。ロトが、ぼーっと前をみてる時誰かが、肩を叩いた。ロトは叫びそうになったが、踊り子が口を手をやった。「お願い！静かにして。」静かに踊り子が言った。踊り子は、ロトの口から手を話し、自己紹介した。「私、ユリ・レーン。ここのお嬢様なの。」ロトが、驚きつつも自己紹介した。「僕は、ロト。宜しく。ユリさん」ロトは、ユリと握手した。

その日は、宿に行き、ぐっすり寝た。

ユリは、知らないが、家に帰っただろう。

「次の日。」

ロトが起きるとサンが、指を差して、「お前に用だとよ。」ユリだ！ロトが、口をあぐりあげた。サンが、クスクス笑う。「じゃ、お幸せに。」そう言うと、サンは、この部屋を出て行った。「にっ兄さん！！！！」ロトの顔が真っ赤になった。

ユリの格好は、ピンクのポニーテールに、青のハチマキ。上は、黒のノースリーブに、パンツをはいていた。

武器はー！！

後ろに、頭に大きな はえとり草のような物があり、桃色の丸い体は可愛らしい。そう。ユリも、フェアリー・サーナらしい。

ユリはロトに、「宜しく。ロト！」と言って、頬に軽くキスをした。
ロトは赤面になり倒れ、部屋を覗いてたサンも、顔が赤くなった。
何がともあれ！仲間が出来た事に違いは無い。
ユリという仲間が増え、
これからも旅は、賑やかになりそうです

くロールルの街く（後書き）

ここまで、ありがとう！

まだまだかくぞお！

へへっ。よかったらまたみてね！

by・カナカナ

く砂漠でく（前書き）

砂漠に来た、ロト達。

しかし！そこにまちつけてた者とは！？

く砂漠で

また、闇の中だ。ここは？ただ、暗い。なぜ、リドマとかサンとかい
なんでないんだ？

「おーい！」僕は、必死に皆の名前を呼ぶ。ー返事は無い。

「ロト・・・」また、優しく暖かい声が聞こえる。「だれだ!？」

僕は言う。声は 答えてくれない。ただ、僕の名前を呼ぶ。「ロト・
・・・」やめてくれ！その声は、頭の中で響く。助けて!!「・・・
ト・」誰かの声が聞こえる。あの声じゃ無い。「ロト。ロト!」目
を開けると、サンがロトを覗き込んだ。「お前、ずいぶんうなさ
れてたぞ。大丈夫か?」「うん・・・」力が無い声で答える。ロト
は、リドマを見た。リドマが、怒鳴る。「だー!!いつまでも寝て
んじゃねえっつーの!!」「そうですのー!」続けてホルンも怒鳴
る。「はは・・・ごめんって・・・」ロトは、ふらつきながらも、
頭に赤いバンダナをする。「いこうか。みんな。」全員頷く。
今は、街にいるが、次は、森かもしれないし、砂漠かもしれない。
けど、ロト達は、歩きだした。

「あつついトコだな。」サンが言う。それもそうだ。歩き続けて約
30分。ここは、砂漠だ。「水ある?」ユリが聞く。「無いですの
ー!」ホルンが、答えた。

街や、村は見当たらない。ーそして、2時間。皆は、喉がカラカラ
だった。サンが、先を指差す。「なあ、あれさ・・・オアシスじゃ
ね?」サンの指差す先を見ると、オアシスだ。皆は、ふらつきなが
らも、言った。そこにある水を、ゴクゴク飲んだ。「生き返るわ。」
ユリが言う。どうやら、ゲンカクじゃ無いようだ。ロトもゆっくり
と水を飲む。美味しい!ロトは、そのまま飲み続けた。リドマが、
サンに言った。「なあ。こいつが、神にえ・・・」そこまで言うと、
サンが口を抑える。「いうな!」サンが呟くように言う。

今日は、ここで野宿だ。ユリはテントをたて始めた。サンとロト、

リドマも手伝った。見事なできまえだ！

全員は、その中に入ってねぶくろを用意した。ユリはすぐ寝た。サンは、ロトを呼んだ。そして、一本のヤシの木の前に来た。サンがあぐらをかく。

「おい。ロトさー・・・神って信じっか？」少しあせったのか、考えこみ口を開く。「ううん。信じてないよ。」サンが、上をむくと、「そっか。」と呟いた。ロトも上を向き言った。「・・・星キレイだね。」

「そうだな。」その時、ドオン！という音が、響き渡った。

ユリもそれには、起きて何！？と言う。

皆は、言葉を失った。

だって目の前にー

大きな魔物がいたのだから。

～砂漠で～（後書き）

はいはい！

カナカナです！

ここまで、呼んでくれてどうもありがとうございます。
これからも宜しく願いしますね。

by・カナカナ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1705c/>

フェアリー・サーナ

2010年10月9日07時55分発行